「星野君の二塁打」の初出版と定本版の比較

初出版：『少年』（1947年8・9月号）	定本版：『日本文学選』新潮社(1956年)
1	1
あたりそくないの小さなフライが、フラフラと遊撃手のあたまの上をこえて、もうれつな勢いで突っこんでくる左翼手の一メートルばかり前にポトリと落ちた。思いがけないテキサス・リーガーである。	当たりそこないの飛球が、ふらふらと遊撃手（ユウゲキシュ）の頭上をこえていった。左翼手（サヨクシュ）が、もうれつな勢いでつっこんできた。だが、球は、その一メートルばかり前にポトリと落ちた。
R中学の応援団はわき立った。	R町の応援団（オウエンダン）は、「わあっ。」と、わきたった。
	まったく、拾いもののヒットである。
一回に一点、二回に一点を獲得して、二点のリードで敵T中学を無得点におさえてきたから、九回の表で、R中学は一挙にその二点を取りもどされて同点に追いこまれていた。こうなると、R中学の選手たちは、追われるものの心ぼそさを感じないわけにはいかなかった。延長戦に持ちこまれそうだ――みんなが、そういう不安をいだきはじめていた。	R町の少年野球団、Rクラブは、一回に一点、二回に一点を入れて、二点の勝ちこしのまま、あい手の、T市少年野球団、Tクラブを六回まで無得点におさえてきた。ところが、七回の表に、一挙、その二点を取り返され、同点に追いこまれてしまった。こうなると、Rクラブの選手たちは、追われる者の心ぼそさを感じないわけにはいかない。延長戦に持ちこまれそうな不安をいだきはじめていた。
そこへ、九回の裏ラスト・インニングのトップ打者二番の山本君が、テキサスとはいえ、とにかく安打で一塁へ出たのだ。応援団が色めき立ったのもむりはなかった。	そこへ、七回のうら、Rクラブの最後の攻撃（コウゲキ）で、最初の打者、岩田が、安打で一塁（イチルイ）に出たのだ。応援団が色めきたったのも無理はない。
よし、ここで一点、それで勝敗はきまるのだ。R中学の選手たちの顔は一度に明かるくなった。もう十分か十五分のうちに、ながくあこがれていた甲子園出場の夢を実現することができるかも知れないのだ。	よし、こゝで一点。その一点で、勝敗がきまるのだ。Rクラブの選手たちの顔は、急に明かるくなった。郡内少年野球の選手権大会の、出場チームになることができるかもしれない。
三番打者、投手の星野が、さきの方、四分の三ほどを黒くぬった愛用のバットをさげてボックスへはいろうとした。だが、そのとき伝令がきて、かれはベンチへよばれた。	八番打者、投手の星野が、先のほうを四分の一ほど黒くぬった愛用のバットをさげて、バッターボックスへはいろうとした。だが、その時、伝令が来て、かれはベンチへよばれた。
一塁ではランナーの山本が足をそろえて、ピョン・ピョンとはねている。足ならしをして、盗塁	一塁では、ランナーの岩田が足をそろえて、ぴょん、ぴょんと、はねている。足ならしをして、

のじゅんびをしているのだ。 　星野は、それをちょっと見て、ベンチへいった。キャプテンの大川と監督の今井先生とが、かれを待っていた。 「星野、山本をバントで二塁へ送ってくれ。杉本に打たせて、どうしても確実に一点かせがなきゃならないから。」 　今井先生は正面から星野の目を見て、ハッキリ、そういった。 　先生がそういうのもむりはなかった。きょうの星野はピッチングの方はかなり上出来だったが、打者としてはふるわなかった。四球が一つ、三振が二つという不景気な成績だ。――だが、星野はがんらいよわい打者ではなかった。あたればそうとうなおお物をかっ飛ばす方だった。だから、かれはこの四回目のアット・ボックスで、名誉挽回（ばんかい）をしてやろうと、ひそかに張りきっていたのだ。こんどは、きっとあたる。なんとなく、そういう予感もしていた。それだけに、かれは、今井先生の言葉にたいして、「はい。」というすなおな返事がしにくかった。 「打たしてください。こんどは打てそうな気がしているんです。」 「気がしているくらいのことをたよりにして作戦を立てるわけにはいかないよ。ノー・ダンなんだから、ここは正攻法でいくべきだよ――わかったな。さァ、みんなが待ってる。」 　ぐずぐずしているわけにはいかなかった。 「はァ。」 　あいまいな返事をして、星野が引きかえすうしろから、キャプテン大川のひくい声が追っかけてきた。 「たのんだぞ、星野。」 　星野は明かるい、すなおな少年だった。人の意見と対立して争うようなことはこのまなかった。	走塁の準備をしているのだ。 　星野は、それをちらっと見て、ベンチへ行った。キャプテンの喜多と、監督（カントク）をしている大学生の別府さんが、かれを待っていた。 「星野、岩田をバントで二塁へ送ってくれ。氏原に打たせて、どうしても確実に一点かせがなければならないから。」 　別府さんは、正面から星野の目を見て、はっきりと言った。 　別府さんがそういうのも無理はなかった。きょうの星野は、投手としてはかなりできがよかったけれども、打者としては、ふるわなかった。投手ゴロ一つ、三振（サンシン）一つ、という不景気な成績だ。だが、星野は元来、弱い打者ではなかった。当たれば相当な大ものをかっ飛ばすほうだった。だから、かれは、この三回めの打撃で、名誉（メイヨ）を回復しようと、ひそかに張りきっていたのだ。今度は、きっと当たる。なんとなく、そういう予感を持っていた。それだけに、かれは、別府さんのことばに対して、「はい。」と、すなおな返事がしにくかった。 「打たしてください。今度は、打てそうな気がするんです。」 「『打てそうな気がする』くらいのことで、作戦を立てるわけにはいかないよ。ノーダンなんだから、こゝは、正攻法でいくべきだ。わかったな。さあ、みんなが待っている。しっかり、やってくれ。」 　ぐずぐずしているわけにはいかなかった。 「はあ。」 　あいまいな返事をして、星野が引き返すうしろから、キャプテン喜多の低い声が、追っかけてきた。 「たのんだぞ。星野。」 　星野は、明かるい、すなおな少年だった。人の意見にさからって、争うようなことは、このまな

しかし、きょうのバントの命令だけは、どうしても、服しにくかった。安打が出そうな気がしてならないのだ。それも、二塁打か三塁打になりそうな気が、しきりにするのだ。バントのギセイ球で、アウトを一つとるのは、もったいない気がする。 だが、野球の試合で、監督の命令にそむくことはできない。自分の意見をよく話して、今井先生に賛成していただくひまがないのが残念なだけだ。 星野は、今井先生の作戦どおり、バントで山本を二塁へ送るつもりで、ボックスにはいった。	かった。しかし、きょうのバントの命令にだけは、どうしても服しにくかった。安打が出そうな気がしてならないのだ。バントのぎせい打でアウトになるのは、もったいない気がする。 だが、野球の試合で、監督の命令にそむくことはできない。星野は、別府さんの作戦どおり、バントで岩田を二塁へ送るつもりでバッターボックスにはいった。
2	2
ランナーの山本は二塁手だった。そして、足の早い選手とはいえなかった。だから、できるだけ塁からリードして、走塁に有利な態勢を取ろうとした。 T中学の投手は、なかなか投げない。バッテリ間のサインは、よういにきまらない。	Tクラブの投手は、なかなか投げない。バッテリー間のサインは、しんちょうをきわめた。 やっと、サインがきまって、投手がプレートをふんだ。 ランナーの岩田は足の速い選手ではなかった。だから、なるべく塁からはなれて、走塁に有利な態勢を取ろうとした。 投手は、ランナーのほうにも、じゅうぶん、注意をはらっている。
そのあいだに、ランナーは少しずつ塁からはなれはじめた。ああ、少し出すぎた。バッター・ボックスにいる星野がそう思うのと同時に、敵の投手は一塁へケンセイ球を送った。速い球だ。あぶない。 山本は砂けむりをあげて、すべりこんだ。 塁審は、たなごころを下にして、両手をひろげている。セーフ！ あぶなく助かったのだ。 一塁のコーチャーが、おお声でランナーに何かいっている。	ランナーは、じりじりと、塁をはなれはじめた。 あっ、少し出すぎた……。バッターボックスにいる星野がそう思うのと同時に、投手は一塁へ矢（ヤ）のようなたまを送った。あぶない。岩田は、すなけむりをあげて、塁へすべりこんだ。 塁しんは、手のひらを下にして、両手をひろげている。セーフ！　あぶなく助かったのだった。一塁のコーチャーが、おゝ声でランナーに何か言っている。
山本の張りきった動作を見ているうちに、星野の打ちたい気もちが、また、むくむくとあたまを	岩田の張りきった動作を見ているうちに、星野の打ちたい気もちが、また、むくむくと頭をもた

もたげてきた。「打てる。きっと打てる。確実にヒットが打てさえすれば、むりにバントをするには及ぶまい。」かれは姿勢を少しかえた。心もちマタを大きく開いて、ひだり足を、ちょっと、うしろへ引いた。 とたんに、敵の投手が第一球を投げこんできた。星野は、あやうくつられそうになってぐっと、こらえた。外角を遠くはなれたボールだった。 第二球！　高めの直球。星野のバットは、大きくスイングした。 あたった。バットのましんにミートした球は、カーンと澄んだ音を立てて、二塁と遊撃のあいだをぬくライナー性のクリーン・ヒットとなった。中堅手が転々する球を追って、やっと、とらえた。そのまに、ランナーは、二塁、三塁。 ヒット！　ヒット！　二塁打だ。 R中学の応援団は総立ちになった。ぼうしを投げあげる気の早い生徒もある。 ボールは、やっと、投手のグローブに返った。 星野は、二塁の上に直立して、両手を腰にあてて、場内を見まわした。 だが、このとき、星野は、今井先生が、ベンチから、にがい顔をして、かれの方を見ていることには気がつかなかったのである。 それはともかく、星野の一撃はR中学の勝利を決定的にした。四番打者の杉本が右翼に大飛球をあげてそのギセイによって、山本がゆうゆうとホーム・インしたからである。 R中学の甲子園出場は確定し、星野三郎はこの試合の英雄になつた。	げてきた。 ――打てる。 きっと打てる。 確実にヒットが打てさえすれば、無理にバントするにはおよばない。 かれは、しせいを少し変えた。心もち、またを大きく開いて、ひだり足を、ちょっと、前へ出した。とたんに、投手が第一球を投げこんできた。予想どおりのつりだま。しかし、星野の最もすきな近めの高い直球……。 星野は、大きくふった。 当たった……。バットのまん中に当たったボールは、ぐうんと延びて、二塁と遊撃の間をぬくあざやかなヒットになった。中堅手（チュウケンシュ）が、転々するボールを追って、やっと、とらえた。そのまに、ランナーは、二塁、三塁。 ヒット！　ヒット！　二塁打だ。 R町の応援団は総だちになった。ぼうしを投げあげる気の早い者もある。 ボールは、やっと、投手のグローブに返った。 星野は、二塁の上に直立して、両手をこしに当てて、場内を見まわした。だが、この時、星野は、別府さんがにがい顔をして、ベンチからかれのほうを見ていることには、気がつかなかった。 星野の一撃は、Rクラブの勝利を決定的にした。九番打者の氏原が、右翼に大飛球をあげ、それがぎせい打になって、岩田がホームインしたからである。 Rクラブの郡内野球選手権大会出場は確定し、星野仁一は、この試合の英雄となった。
3	3
甲子園の全国中等優勝野球大会の日どりはさしせまっていた。だから、R中学のティームは、	郡内少年野球選手権大会の日どりは、さしせまっていた。だから、星野たちのチームは、自分の

自分たちの地区からの出場権を確立した試合の翌日も、練習を休まないことになっていた。選手たちは規定の午後一時にあつまって、やくような太陽の下で、肩ならしのキャッチ・ボールをはじめていた。 　そこへ、監督の今井先生が姿をあらわした。選手たちは、先生のまわりにかけあつまって、てんでにぼうしをぬいで、あいさつをした。 　キャプテンの大川は、いつものとおり、先生がシート・ノックをはじめるものと思ってバットを取りにいこうとした。だが、先生はそれをとめた。 「大川君、ちょっと待ちたまえ。少し話がある。みんなも、ここへ、まるくすわってくれないか。」 　先生は少し歩いて、大きなしいの木のかげにあぐらをかいた。 　選手たちも、先生にむかいあって、それぞれの位置に同じように、あぐらをかいた。半円をえがいて、先生をかこんだ形になった。 「諸君、きのうはありがとう。おかげで、ぼくらも待望の甲子園へゆけることになった。おたがいに喜んでいいと思う。――ところで、きょうは、昨日の諸君の善戦にたいして心からお礼をいうというあいさつをしたいところなんだが、ぼくには、どうも、そういいきれないんだ。」 　補欠もいれて十五人の選手たちの目は熱心に先生の顔を見つめている。先生の重々しい口調（くちょう）の底に何かよういならないものがあることを、だれもがハッキリ感じたからである。 　先生はポケットからタバコをだして、ゆっくりとライターで火をつけた。それから深くけむりをすいこんで静かに言葉をつづける。 「ぼくが、監督に就任するときに、君たちに話した言葉は、みんなおぼえていてくれるだろうな。ぼくは、君たちがぼくを監督として迎えることに	地区からの出場権をかくとくした試合のあくる日も、練習を休まなかった。選手たちは、定められた午後一時に、町のグラウンドに集まって、焼けつくような太陽の下で、かたならしのキャッチボールをはじめた。 　そこへ、監督の別府さんがすがたを現わした。選手たちは、別府さんのまわりに集まって、めいめい、ぼうしをぬいで、あいさつをした。 　キャプテンの喜多は、いつものとおりに、打撃の練習をはじめるものと思って、バットを取りに行った。別府さんは、喜多からバットを受け取ると、 「みんな、きょうは、少し話があるんだ。こっちへ来てくれないか。」 　と言って、大きなカシの木かげに行って、あぐらをかいた。 　選手たちは、別府さんのほうを向き、半円をえがいて、あぐらをかいた。 「みんな、きのうは、よくやってくれたね。おかげで、R クラブは待望の選手権大会に出場できることになった。おたがいに喜んでいいと思う。ところで、きのうのみんなの善戦に対して、心からの祝辞を述べたいのだが、ぼくには、どうも、それができないのだ。」 　補欠も入れて十五人の選手たちの目は、じっと別府さんの顔を見つめている。別府さんの重々しい口調（クチョウ）の底に、何か容易ならないものがあることを、だれもがはっきり感じたからである。 　別府さんは、ひざの上に横たえたバットを、両手でゆっくり回していたが、それをとめて、静かにことばを続けた。 「ぼくが、監督に就任するときに、君たちに話したことばを、みんなは覚えてくれているだろうな。ぼくは、君たちがぼくを監督としてむかえる

賛成なら就任してもいい。校長からたのまれたというだけのことではいやだ。そうだったろう。大川君。」 大川は、先生の顔を見て強く、うなずいた。 「そのとき、諸君は喜んで、ぼくを迎えてくれるといった。そこで、ぼくは野球部の規則は諸君と相談してきめる、しかし、一たんきめた以上は厳重にまもってもらうことにする。また、試合のときなどに、ティームの作戦としてきめたことは、これに服従してもらわなければならないという話もした。諸君は、これにも快く賛成してくれた。その後、ぼくは気もちよく、諸君と練習をつづけてきて、どうやら、ぼくらの野球部も、少しずつ力がついてきたと思ってる。だが、きのう、ぼくはおもしろくない経驗をしたのだ。」 ここまできいた時、星野三郎は、あるいは自分のことかなという気がしてきた。なるほど、ぼくは、きのうバントを命じられたのに勝手にヒッティングに出た。ティームの統制をやぶったことにはなるかも知れない。しかし、その結果は、かえって、わるくなかったはずだが‥‥かれは、どうしたって、自分がしかられるわけはないと、思いかえした。 そのとたんに、先生はすいかけのタバコをぽんと、すてた。そして、ななめ右まえにすわっている星野の顔を正面から見た。 「まわりくどいいい方はよそう。ぼくは、きのうの星野君の二塁打が気にいらないのだ。バントで山本君を二塁へ送る。これがあのときティームできめた作戦だつた。星野君は不服らしかったが、とにかくそれを承知したのだ。いったん承知しておきながら、勝手にヒッティングに出た。小さくいえば、ぼくとの約束をやぶり、大きくいえば、ティームの統制をみだしたことになる。」	ことに賛成なら、就任してもいい。町長からたのまれたというだけのことでは、いやだ。そうだったろう、喜多君。」 喜多は、別府さんの顔を見て、強くうなずいた。 「そのとき、君たちは、喜んで、ぼくをむかえてくれると言った。そこで、ぼくは、君たちと相談して、チームの規則をきめたのだ。いったん、きめた以上は、それを守るのが当然だと思う。また、試合のときなどに、チームの作戦としてきめたことには、絶対に服従してもらわなければならない、という話もした。君たちは、これにも快く賛成してくれた。それで、ぼくも気もちよく君たちと練習を続けてきたのだ。おかげで、ぼくらのチームも、かなり力がついてきたと思っている。だが、きのう、ぼくはおもしろくない経験をしたのだ。」 こゝまで聞いたとき、「これは自分のことかな。」と、星野は軽い疑問をいだいた。けれども、自分が、しかられるわけはないと、思い返さないではいられなかった。 ――なるほど、ぼくは、きのう、バントを命じられたのに、かってに、打撃に出た。それはチームの統制を破ったことになるかもしれない。しかし、その結果、ぼくらのチームが勝利を得たのではないか……。 その時、別府さんは、ひざの上のバットをコツンと地面に置いた。そして、なゝめ右まえにすわっている星野の顔を、正面から見た。 「回りくどい言い方はよそう。ぼくは、きのうの星野君の二塁打が気に入らないのだ。バントで岩田君を二塁へ送る。これがあのとき、チームできめた作戦だった。星野君は不服らしかったが、とにかく、それを承知したのだ。いったん、承知しておきながら、かってに打撃に出た。小さく言えば、ぼくとの約束（ヤクソク）を破り、大きく言えば、チームの統制をみだしたことになる。」

「だけど、先生、二塁打をぶっぱなしてＲ中学をすくったんですから――。」 　山本が口を出した。 「いや、山本君のは結果論というやつだ。いくら結果がよかったといって、統制をやぶったという事実にかわりはないのだ。――いいか、諸君、野球は、ただ勝てばいいのじゃないぜ。特に学生野球は、からだをつくると同時に精神をきたえるためのものだ。団体競技として共同の精神を養成するためのものだ。自分勝手なわがままは許されない。ギセイの精神のわからない人間は、社会へ出たって、社会を益することはできはしないぞ。それに実際問題としても、あのとき星野君の打った球のおかげで、ダブル・プレイでも食ったとしたら、どうなったと思う。ワンヒット・ワンランのチャンスもないのに、あの場あいヒッティングに出るなんて、危険きわまるプレイといわなければなるまい。」	「だけど、二塁打を打って、Ｒクラブを救ったんですから。」 　と、岩田がたすけ船を出した。 「いや、いくら結果がよかったからと言って、統制を破ったことに変わりはないのだ。……いいか、みんな、野球は、たゞ、勝てばいいのじゃないんだよ。健康なからだをつくると同時に、団体競技として、協同の精神を養うためのものなのだ。ぎせいの精神のわからない人間は、社会へ出たって、社会を益することはできない。」
今井先生の口調が熱してきて、そのほほが赤くなるにつれて、星野三郎の顔からは血の気がひいていった。 　選手たちは、みんな、あたまを深くたれてしまった。	別府さんの口調が熱してきて、そのほおが赤くなるにつれて、星野仁一の顔からは、血の気がひいていった。選手たちは、みんな、頭を深くたれてしまった。
「星野君はいい投手だ。おしいと思う。しかし、だからといって、ぼくはティームの統制をみだしたものをそのままにしておくわけにはいかない。罪にたいしては制裁を加えなければならない。――」	「星野君はいい投手だ。おしいと思う。しかし、だからと言って、ぼくはチームの統制をみだした者を、そのまゝにしておくわけにはいかない。」
そこまできくと、思わず一同は顔をあげて先生を見た。星野だけが、じっとうつむいたまま、石のように動かなかった。	そこまで聞くと、思わず一同は顔をあげて、別府さんを見た。星野だけが、じっとうつむいたまゝ、石のように動かなかった。
「ぼくは、星野君の甲子園出場を禁じたいと思う。当分、謹慎（きんしん）していてもらいたいのだ。そのために、ぼくらは甲子園の第一予戦で負けることになるかも知れない。しかし、それはやむを得ないこととあきらめてもらうより仕方	「ぼくは、今度の大会に星野君の出場を禁じたいと思う。当分きんしんしていてもらいたいのだ。そのために、ぼくらは大会で負けるかもしれない。しかし、それはやむを得ないことと、あきらめてもらうよりしかたがない。」

がないのだ。」 　星野はじっと涙をこらえていた。いちいち先生のいうとおりだ。かれは、これまで、自分がいい気になって、世の中に甘えていたことを、しみじみ感じた。 「星野君、異存（いぞん）はあるまいな。」 　よびかけられるといっしょに、星野は涙で光った目をあげて強く答えた。 「異存ありません。」 　今井先生を中心とした若い中学生の半円は、そのまま、しばらくくずれずにいた。 　はげしい太陽がひと気のないグラウンドをまっしろに光らしている。　（おわり）	星野は、じっと、なみだをこらえていた。 　――別府さんのことばは、一つ一つ、もっともだ。自分は、今までいい気になっていたのだ。 　かれは、しみじみと、そう思わないではいられなかった。 「星野君、異存があったら、言ってくれたまえ。」 　別府さんのことばに、星野は、なみだで光った目をあげて、はっきりと答えた。 「異存ありません。」 　別府さんを中心とした少年選手たちの半円は、しばらく、そのまゝ動かなかった。 　ぎらぎらする太陽の光線が、人かげのないグラウンドに、白くはね返っていた。

※初出版は旧字体・旧かなづかいを新字体・現代かなづかいに改めています。

※下線部については、原作（定本版）と現行教科書のキーワード対照表を参照してください。